

同窓会会報

第39号

平成3年8月18日発行

富山県立上市高等学校



心と体の健康を

同窓会長 藤原 平蔵

同窓会員の皆様、御健康で、御活躍のことを、御慶びいたします。

上市高等学校も、発展の一途を辿り、校長を中心として、教職員一致協力され、二十一世紀に立派に活躍出来る、よりよい社会人の育成にと、御指導されていられるに深く敬意を表します。

平成三年三月七日に、卒業生、三百三十九名の入会式を行い、一万七千六百六十名を数え、豊かで、強力な同窓会となりました。

会員各位には、それぞれの分野で活躍され、その業績を挙げて居られることは、同窓会の誇りであります。御承知の通り、国際化時代であり、日本は経済大国として重要な立場にあることは、テレビ、新聞等で承知のことと存じます。

あってはならない科学戦争、湾岸戦争後の処理の件で

各国は、政治、経済、教育各種の重要問題の改革、発展等、これに対応する多くの事項が、直接・間接に、職場で処理される御苦労をお察しいたします。

亦特に地球環境温暖化防止、生物保護は、地球上に生存する全てのものに関係することあります。

現にこれに関連するものとして、ノーカーデーの問題で関東四都県、二市で毎週水曜日一回休日実施され、各個人もそれぞれの立場で研究処理されることでしょう。

以上の如く複雑多忙な社会状勢下にあっても忘れられぬことは、「健康」の二字であり、

「人に勝つより自分に勝て」との意志を強め、正しく厳しく、自からを律すべきと思います。

会員の皆様健康であることこそ同窓会の発展であり、誇りであります。

御多幸をお祈りします。



学社連携に独自の展開を

学校長 福島功

会員各位には益々御健勝にて御活躍のこととお慶び申し上げます。

平素より母校の発展と充実に暖かい御支援を賜わり、厚く御礼を申し上げます。

さて、国際化、情報化、高齢化に象徴される社会の急激な変化は、生徒を取り巻く教育環境に著しい変化をもたらし、さらに、豊かさに伴う社会状況の変化や価値観の多様化は、生徒の意識や行動に深くかかわり、概して個としての確立がおくれているように思われます。

生徒の興味、関心、能力の多様化という側面からも、教育の学校完結主義を見直して基礎、基本の重視と個性の尊重を求め、生涯学習体系への基盤づくりが緊急課題として進められていく中にあって、私達本校の教職員は学習指導、進路指導、生徒指導、特別活動の四領域から生徒一人一人の心に迫って、健全育成を図ることに努めています。

目指すところは、将来個人として自立し、創造性に富み、社会連帯意識をもち、国際感覚を身につけ、生きがいを求めて主体的に行動できる若者の育成にあります。

遙々たるものではありますが、それぞれの領域において光明を見出しつつあります。

ところで、このような資質の育成について明言できることは、本来生徒は学校、家庭、地域社会のそれぞれにおいて、望ましい学習体験を重ねながら発達課題を修め

ていくのであり、そのそれに特質があり、生徒の人間形成にかかる役割もまた異なっているということです。

一方、現実には、諸々の事情による家庭教育力の低下や、生徒在住地の広域化と地域社会における人々の連帶意識の希薄化による教育機能の低下など、好ましくない傾向を見聞いたします。三者それが教育機能を發揮しながら連携し、相互に補完的な役割を果すという総合的な視点からの構想を再構築することの緊急性を痛感いたします。

とりわけ学社連携について、その境界線上の教育活動として、特定の学習活動を深めるための施設等の利用による集団生活訓練、体験学習等や奉仕活動、又全体的、調和的発達のための自然や文化とのふれ合い等の一般的構図とは別に、より小さな、しかしそれが強靭な生涯共同体とでもいうべき「同窓」を基盤とした小地域的連帶を社会教育の場に据え、人としての在り方生き方について、在校生へ有言無言の叱咤激励が注がれる機能に、将来に向かっての本校の確実なあゆみを予見いたします。

歴史と伝統の中に培われてきた「勤労、自治、向上」の精神が、不易と流行に心しながら、不透明な21世紀に向かって脈々と流れづけていくことを祈念してやみません。

上市高等学校の発展を期して

教頭 斎藤司

日頃、同窓会の皆様には本校教育発展のために、何かとご支援を賜わり厚くお礼を申し上げます。また卒業生の皆様の各界でのご活躍、誠にご同慶にたえません。

かくいう私も第9回の卒業生として、母校で教鞭を執る事の幸せを実感いたしておりますが、それだけにまた責任の重さも痛感いたしております。就任僅か3ヶ月余でございますが、何かに付け私どもの時代と比較するくせがついてしまい、苦笑しているような始末でございます。

昨今は大変難しい時代になってまいりました。原因、理由は多々ありご承知の通りでございますが、このような社会の変動期における高等学校教育はいかにあるべきかがまさに問われているわけでございます。本校もご多

分にもれずその渦中になります。

そういった中で、私どもは学校長を先頭に全教職員が打って一丸となり、本校のあるべき姿を模索し、同窓会、PTA、関係各位の皆様と連携を図りながら理想を追究してまいる所存でございます。ときあたかも高等学校では平成6年度より学習指導要領が改訂され、各地域、各学校の実態に即したより弾力性のあるカリキュラムが可能となりました。目下鋭意検討中といったところでございます。

不易流行、温故知新さらに創意工夫といった言葉は時代を超えた瑞々しさをもっておりますが、本校に学ぶ生徒諸君のために全知全能を傾け、情熱をもって教育指導に当たる所存でございます。なにとぞ皆様方の一層のご指導ご鞭撻をお願い申しあげます。

◇◇◇思い出◇◇◇

卒業50年

“思い出”

私達が、農林学校を卒業したのは、昭和16年3月、丁度、太平洋戦争が勃発する直前の、極めて緊迫した時代であった。

卒業以来50年、よくも此処まで来たものだと、今更乍ら驚きの今日此の頃である。

振り返って見れば、此の50年程、絶え曲折の有った事は、多くは無いで有らう。

徹底した軍国主義教育を受け、統べてが戦争に結び付けられ、欲しい物も我慢して、その戦果に一喜一憂したもので有るが、時に利非ず、敗戦の豪き目とは相成り、付け焼き刃の民主主義とかなんとかで振り回されつつ、のうのうと長らえる事とはなった次第である。良きに付け悪しきに付けて、世紀の区切りと、あちらこちらにぶつかり乍ら、再生の道を歩み続けて、來たのである。

敗戦後、初めての同窓会は、懐かしい友に会うことが出来たものの、永久に帰らぬ人の数も多くあったのは、誠に寂しい限りで有った。

年を経るに従って、あの入此の人、無二の友の顔が、次々と少なくなつて行くのは、誠に耐えられない事で有る。「生！」有るもの宿命と、言わねばなるまい。

たまたま会うと、「よう一」とか言って手を挙げて、暫し無言の儘……けれども無邪氣であった會つての頃の事、

卒業40年

“多病息災”

去る二月、シンポジウム「医療最前線—高齢化社会を迎えて」が開かれた。それによると総人口に占める65歳以上の方の割合は平成2年度で11.9%となっており、中でも「後期高齢者」と呼ばれる75歳以上の方がどんどん増え、平成2年度の590万人が、10年後には850万人になると予測されている。この様な人類史上でも例を見ない高齢化社会を迎えて、従来の近代医学では研究がどんどん細分化し、領域ごとに専門化していく傾向の中で、高齢者の色々な訴えには、臓器別の専門家ではうまく対応できないような状態になっている。

上市農林農業科 第18回（昭和16年卒）

庄司宗典

その後どうしたのか、変わった事が無かったか……頭の中は走馬灯の如く、ぐるぐると駆け回り、感慨無量……やっと笑顔が戻り、話しが始まるのである。

「戦争」と言う事を除けば、良い時代で有ったとも言える。

「お前達、モッコと言う字知つとるか？」……「モッコと言う字は「田んぼを呑む」と書くんヒヤ」(畚)……とユニークな教え方の青木先生、数学の解き方は種々雑多、熟読含味、理解して公式を上手に使う事、とお尻を叩かれ叩かれして講義録で勉強させられた柴田先生、葱ばかり作らせられた？？先生、大事件の晩、自宅に泊めてお説教された青木先生……等々……

眼目山に走った事、……大岩へのマラソンの事、など枚挙に暇が無い。

私は同級の人依り、2歳も年長で、今年は古稀である。卒業50年、70才、数字的には当然であるが、何かしら因縁めいた感じがする。此れも年の所為だらうか？

年はとっても、気は若く、此れからも勉強を重ねて、新しい時代に取り残されない様に一日一日を充実した日を続けたいと思う。

寺の坂 古稀の坂道 墓参り

蟬時雨 古稀の宴や 孫ら居て

上市高校普通科 第3回（昭和26年3月卒）

中川祥子

アメリカの老人医療教育では、老人医療のゴールは、生活の質（Quality of Life）や、病気を抱えながらも身体の自立した機能をできるだけ維持する、つまり多病息災がゴールだ、という意識変革がアメリカの老人医療の世界にある。老人はそれなりにホメオスタシスが保たれているから、あまり強力な薬を使いすぎると壊してしまうおそれがある。

かえりみますと仕事柄、一日中立ちづづけの毎日でしたが、何とか健康で過せましたのも、あの高校の2年間、雨の日も雪の日も、4km余りの道のりを歩いて通学した

賜物と思ふ事す。

今、勤めを退き、土いじりに専念できるようになり、ささやかな楽しみに胸を躍らせております。

学区制の改革により、2年編入時の担任は、今はなき池田六郎先生でした。私の出生地と同じ青森県出身との事で、一度はお供をしてネアタを観に行きたいと思っておりましたがそれも夢で終ってしまいました。心から御冥福をお祈り申し上げます。

卒業30年

“花を賞で、その根をおもう”

高校を卒えて30年が過ぎました。卒業した頃は、戦後復興から、高度経済成長に入ろうとする境い目でした。そのため、農業科の多くの仲間達は、専業からだんだんと兼業へ、そして副業農業へと農業の比重が徐々に減少する30年でした。

今日の農業の姿が予測出来ていたなら、別の道を選んだかもしれません、当時は農家の長男だから農業科への流れの中でそれなりの希望をもって上市高校に入学したものです。

兼業から、副業化への流れの中で、多くの仲間達は、他産業(農業以外の産業)で活躍する中で、ほかに能はないとの開き直りの心でなんとか農業で生きてきました。

今の生活の柱をなすものは、米と亮菌（野菜菌）と二
つです。

学校で学んだ技術の流れの中で今日も生きているものは、農業機械利用の技術と壳苗の育苗技術の一部でしょうか。米については、柳瀬先生に学んだV字稲作の基本は、アルギット農業中心の今では、全く逆の稲の育て方をしていますし、ニラについては、その存在すら知らなくなってしまったのです。

卒業20年

“あしあと”

先日、学校から20年組つどいの世話を依頼され、これも何かの縁と受けたものの、20年？もうそんなになるのかとただ驚くばかりでした。

卒後40年、我が家は85歳の母を筆頭に、猫までもが高齢化しつつあります。

人は誰しも、このむとこのまさるにかかわらず、生老・病・死・に直面せねばなりません。楽しみを持ち、正しい生活リズムを崩さず、生きがいを失わず、精神的にゆとりある日常生活の中で、病気とともに一緒に生きてゆけるよう、第二の人生をみじめまいと願っておられます。

上巿高校農業科 第12回（昭和35年3月卒）

小 善 由 久

しかし、より基本的な事がらは生きています。

小・中学校の頃と比べ、仲間達や先生方には個性的というか、多様な先生(人)がいるものだ。「生き方は一つや二つでないぞ」！ということが、今日に至るまでの考え方の指標になっています。

多様な生き方の中で、農業では、アルギット農業を中心としています。より美味しく、より安全な物をという消費者ニーズにこたえるためには、より最適と考えるからです。

アルギット農業の栽培プロセスを確立されたのは、新鞍宏さん（先生）で、昭和16年卒の上市高校の大先輩であることを、偶然にも会員名簿で知り、もっとガンバラねばとの思いをあらたにしています。

上市高校の水田にもアルギット米が栽培されていることも併せて、心強く思っています。

経済大園への、30年でありますたが、花がきれいな時、花にみとれて、それをささえている根のことは、忘れがちになります。

卒業30年を機に、より大切なことを根本より考え方直してみたいと思います。

（上）農業科第23回（昭和46年3月卒）

加藤幸博

昭和46年3月に卒業してから、2度クラス会を行なっていませんが、今回久しぶりに皆さんと会えるのかと思うと、懐しさで胸が熱くなるのを感じました。

20年、長いやうで短かい不思議な心境になるのは、私一人ではないと思います。

これも、今までにとても過去を振り返っている余裕がなかったからというのが本音です。

私は、農家の長男として農業科に進みましたが、今になって考えてみれば、三年間を通しての実習体験はたいへん意義あるものであったと思います。

田植え、稲刈り、野菜・花づくり、家畜の肥育、丸山での搾乳など全て手作業でした。

夏はむし暑く、鶏舎、牛舎などは奥くてとても中におれる状態ではなく、冬は寒い中除雪に汗を流していました。（けっして楽なものではなかった。）

しかし、こうしたいろんな実体験を積み重ねたおかげで、忍耐力、精神力が形成されたのではないかと思います。

カマク強いということばは、はたして今の世代にあまり受け入れられないものかもしれません、人間として長い人生を歩んでいくためには、最も大切なことではないでしょうか。

こう言う私も、現在農業専従ではありません。地元の農協に勤務し、微力ながら農業に貢献しているつもりです。

また、何人かは中核農業士として、りっぱに頑張っていらっしゃいます。

農業とはかけ離れた職業を選択された人に対しても、三年間のつらさ、苦しみとしたものが上高魂として、きっと生活の糧になっているものと信じています。

近年、農業というと暗いイメージに取られがちですが、日本は元来水の豊かな農業国です。

この自然に恵まれた立地条件を生かして、日本から農業が消えていかないよう、常に農業ということばを根底に持っていたいものだと考えています。

エピソードを一つ。

早弁何とかといいますが、学生の時はよく食べました。三時間目前の休み十分間に弁当を食べ、昼に食堂のパン、牛乳、うどんを（パンがたいへんおいしかった）、帰宅途中にラーメンといった具合。自宅へ帰ってからは、もちろん夕飯を食べる。毎日よく続いたものと我ながら感心しています。

いろんな思い出がかけめぐりましたが、今回同窓会よりの呼びかけを受け、深く感謝申し上げます。

今後共末永く、この集いを続けていけるよう頑ってやみません。

皆様方とまた会える日を楽しみにしています。

卒業10年

『高校生活の想い出』

昭和56年に卒業してから、もう10年が過ぎ、今思えばあつというまの出来事のように思えます。

当時を思い出して見ると、私は野球部に在籍しており真夏の暑い砂漠のようなグラウンドで毎日、最後の夏の大会に向けて、練習をしていた事が、一番最初に思い出されます。ただ練習がつらくて当時は、こんなつらい事をしなくてもいいのに、なぜ野球部になんか入ったのだろ

上市高校普通科 第33回（昭和56年3月卒）

石 黒 弘 一

うと思うばかりでした。しかしいま思えば、これもいい思い出です。

卒業して10年、現在は結婚して2人の子供もいて仕事に忙しく追われている毎日ですが、たまに野球部の練習している姿を見ると、当時の熱意が蘇ります。



婦人部寄稿

茫茫々の風

上市高等女学校

第18回

(昭和19年3月卒)

藤原トミ子

限りなく五月の空の蒼澄めば吾子いぬ部屋の窓開け放つ

曇干し寝具整す炎天も苦とならず今宵子の帰り来ぬ

遠き地に職得しと音子の電話安堵の中の淋しさに聞く

未知の地に子を置き帰る夜の車窓泪のごとき雨滴流るる

街などへ往くこと吾子は氣易げに帰省終りてみちのくに発つ

窓を閉めカーテンを引くわが仕草吾子去りし部屋に刻ながくかけ
忙しなく子を発たしめて帰る野路思いは不意に悔いとなりゆく

子ら巢立ち包むものなきわが双掌胸にあつれば不意に佗しき
新しき吾の生甲斐何ならむ胸うち過ぐる茫茫々の風

遊学の子より届きしプレゼント抱けばかすか子の匂い顕つ
尚この作は、本校を卒業し福島大に進学され、
現在千葉県にて教職についておられる、ご子息に
寄せて詠まれた中のものです。